

## 杜牧の詩と散文：その両者を支える創作基盤

愛甲，弘志

<https://doi.org/10.15017/2332661>

---

出版情報：文學研究. 80, pp.153-174, 1983-02-25. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

## 杜牧の詩と散文

——その両者を支える創作基盤——

愛 甲 弘 志

後世の杜牧の詩文に対する評価については、既に、譚黎宗慕氏が「杜牧研究資料彙編」の中で、杜牧に言及する尅大な資料を蒐集しており、また山内春夫氏は「杜牧の詩文の上に占める地位評価の確定時期について」という論文の中で、杜牧の詩文に対する評価を歴史的に系統だてて詳論している。後世の杜牧の詩文に対する評価は、この二つの論著に因って概ね網羅し得たといえる。

ところで、これまでの杜牧の詩文に対する評価について、字句に対する瑣屑な評価はさておき、杜牧の詩文の性格を巨視的に把握し得ると思われる評価を検討してみると、概ね次のような二つの評価に大別できるように思われる。その一つは、『唐書』に記載されている次のような評価である。

牧、詩に於て情致豪邁、人號して小杜と爲し、以て杜甫に別つと云ふ。『唐書』卷二百六十六杜佑傳附杜牧傳

この「豪邁」という評語は、例えば、「感懷詩一首」〔樊川文集〕卷二や「郡齋獨酌」〔同〕といった詩について、よく当たっているといえる。また、この「豪邁」という評語が詩についてのみならず、むしろ詩以上に散文について当たっている者が多い。「罪言」〔同集卷五〕・「原十六衛」〔同〕・「戰論」〔同〕・「守論」〔同〕といった一連の論策は、先

挙げた詩と同様に憂国の情を吐露する杜牧の「剛直」な志から発せられた名作ばかりである。故に『唐書』にまた次のような記述があるのも当然の事といえる。

牧、剛直にして奇節有り。小謹に鯁鯁たらず、敢て大事を論列し、病利を指陳すること尤も切至。(前出)

いま一つの杜牧の詩文に対する評価は次の如くである。

李義山・劉夢得・杜牧之の三人、筆力相上下せず。大抵律詩に工にして古詩に工ならず。七言尤も工にして五言微弱なり。佳句有りと雖も、然れども韋・柳・王・孟の高致には如く能はざるなり。義山奇趣多く、夢得高韻有り、牧之専ら華藻を事とす。此れ其の優劣なるのみ。(歳寒堂詩話)上

ここに言う「華藻」という評語の対象になる作品は「宣州留贈」(樊川外集)・「贈別」(樊川文集)巻四などといった艶麗な詩にあるといえる。

このように、杜牧の詩文について、一方では、「剛直」という評価があり、また一方では、「艶麗」という評価があり、更には、その両面をも有するという評価もある。

牧、才高く俊邁にして不羈。其の詩豪にして艶、氣概有りて晚唐人の能く及ぶ所に非ざるなり。(直齋書錄解題) 卷十六「樊川集二十卷外一卷」の項

確かに、これらの評価は、どれを取ってみても否定することはできない。しかしながら杜牧を語るとき、単にその両面を善くした文人だと片付けてしまうのも早計すぎるといえる。何故ならば、「剛直」と「艶麗」という評価はあまりにも対照的な概念であると考えられるからである。私の考えるところ、このような評価の一つ一つは、杜牧の全体像を把握するには、あまりにも部分的とも平面的ともいえる評価であると思われる。

そこで私は、杜牧が作った詩文を可能な限り時代順に並べ直すことによって、杜牧の詩文を解釈し、その文学観を明らかにし、杜牧にとって「剛直」なるものと「艶麗」なるものとの関係が、どのように説明されるべきものであ

たかを考察していきたい。

二

いま仮に杜牧の作品を便宜的に詩と散文の二つに分けて考えてみることにする。

杜牧の散文の性格については、既に私はこれを他の機会に詳論したことがあるが、その概略を述べれば次の如くである。すなわち杜牧の散文は、歴史家・経世家としての立場に立って書かれている。そして歴史家・経世家としての杜牧を形成するに至った要因は、早くも彼の幼少期にこれを求めることができる。

例えば、杜牧の祖父は、かつて名宰相と認められ、また制度の書『通典』二百巻を編んだ杜佑であって、杜牧の散文には、この祖父の影響を強く受けた痕跡が色濃く認められること。また杜牧の生きた時代が既に太平の世ではあり得なくなっており、幼少の杜牧は、当時の朝廷の士大夫達の藩鎮への対応の仕方に強い関心を寄せ、具にこれを観察していたこと。更には現代的意味でかなり合理的発想をし得た戦国末期の思想家・荀子から強い影響を受けていたことなどが、それである。

因みに彼の散文創作の経緯を見てみると、二十三歳という最も早い時期に作ったと認められる作品に「阿房宮賦」(『樊川文集』巻一)がある。これは、時の天子である敬宗の贅沢三昧ぶりを諷刺するという主題の下で、これを秦の始皇帝の世に仮託して筆を下ろしているが、それについて、宋の王應麟は次のように評している。

荀子曰く、千人萬人の情、一人の情是れなりと。阿房宮の語此れに本づく。(『困学紀聞』巻十)

杜牧は、この「阿房宮賦」の中で、作品全体を要約した語として「ああ一人の心は千萬人の心なり」と述べているが、この語は、王應麟が指摘するように「荀子」の「不苟篇」に基いたことばなのである。

この「阿房宮賦」は杜牧が科擧の試験に合格する二十六歳より以前に作ったものであるが、それ以後の散文には、時局に対する自己の見解を述べた論策、ある人物の事蹟を述べた列伝、或いは古典の註釈書などがある。今、それらの著作を製作年代順に表示すると次の如くである。

「燕將錄」(樊川文集 卷六) 二十五歳

「寶列女傳」(同集卷六) 同

「同州澄城縣戸工倉尉廳記」(同集卷十) 同

「罪言」(同集卷五) 三十二歳

「原十六衛」(同集卷五) 同

「戰論」(同集卷五) 同?

「守論」(同集卷五) 同?

「上李司徒相公論用兵書」(同集卷十二) 四十一歳

「上李太尉論北邊事啓」(同集卷十二) 四十二歳

「上李太尉論江賊書」(同集卷十一) 四十三歳

またこのほか、製作年代を確定し難い散文に、次のようなものがある。

「張保臯鄭年傳」(同集卷六)

「三子言性辯」(同)

「題荀文若傳後」(同)

「論相」(同集卷五)

「注孫子序」(同集卷十)

「與人論諫書」(同集卷十二)

これらの著作を一読すれば、杜牧の歴史家・経世家としての面目は終止一貫して保持されていること明らかであるし、これらの作品を書き著した杜牧の性情に、先に挙げた『唐書』に述ぶるが如き「剛直」な気風をも窺い知ることが出来る。

さて、散文の中から垣間見た杜牧像は、これまで述べてきた様に、かなり「剛直」な気風を有する人物であり、従って作られた作品も気骨あるものであるということは、理解できたが、一方詩歌については、果してどのような印象が得られるであろうか。

三

これまで杜牧の散文にのみ着目して、杜牧像及び彼の作風について論じてきたが、視点を転じて、彼の詩歌について考察してみると、散文の場合のように明快直截には論じられない複雑な要素を孕んでいるようである。それについて、杜牧の経歴と合わせて論じてみたい。

杜牧は文宗の大和二年二月(杜牧二十六歳)に科挙の試験に合格し、次いで同年三月には制挙の試験(賢良方正能直言科)にも合格し、弘文館校書郎・試左衛兵曹参軍を授けられた。そして同年十月、沈既濟の子・沈傳師が江西觀察使として洪州に赴任するに当たって、招かれて江西の幕下に入り、以後、開成四年(杜牧三十七歳)に左補闕史館修撰となつて長安に戻るまでの約十年間、殆どこの江南地方に住むことになるのである。(この間、杜牧は三十三歳から三十五歳にかけて、しばらく監察御史として洛陽に分司してはいるが、杜牧の意識としては、この洛陽での生活も、江南での生活とはほぼ同じ意識の下に生活しているように思われる。)

この頃の生活について、後年杜牧は次のように述懐している。

十年幕府の吏と爲り、毎に簿書宴遊の間に促束たり。(樊川文集 卷十六「上刑部崔尙書状」)

念昔游

昔游を念ふ

十。載。飄然繩檢外

十。載。飄然として繩檢の外

罇前自獻自爲酬

罇前自ら獻じ自ら酬を爲す

秋山秋雨閑吟處

秋山秋雨閑吟の處

倚徧江南寺寺樓

倚り徧しあまね寺寺の樓 (同集卷二)

題禪院

禪院に題す

觥船一棹百分空

觥船一棹百分空し

十。歲。青春不負公

十。歲。の青春公に負かず

今日鬢絲禪榻畔

今日鬢絲禪榻の畔

茶煙輕颺落花風

茶煙輕く颺がる落花の風 (同集卷二)

遣懷

懷を遣る

落魄江南載酒行

江南に落魄して酒を載せて行く

楚腰腸斷掌中輕

楚腰腸斷掌中に輕し

十年一覺揚州夢

十年一たび覺む揚州の夢

占得青樓薄倖名 占ち得たり青樓薄倖の名 (『樊川外集』)

これらの詩文から、十年もの間、酒色に耽った放蕩三昧な江南での生活、杜牧にとっては楽しい日々を容易に想像することができる。

また、次に掲げる記事も、杜牧の当時の風流才子ぶりを窺うに足る資料である。

時に淮南、繁盛を稱すること京花に減せず。且つ名姫绝色多し。牧、心賞を恣にす。牛相、街吏の杜書記平安を報ずるの帖子を収め、篋に盈つるに至る。(『唐才子傳』卷六)

これは、色街に通う杜牧の安全を氣使った上司・牛僧孺が、配下の者に尾行させた結果、その報告書が箱に溢れるまでになったことを述べており、杜牧がかなりなうでの風流才子であったことを物語っている。

従って、当時、中国随一の繁華の地と言われた揚州をも含めた江南での自由奔放な生活に於いて、杜牧がその生涯の中で最も多く艶麗な詩を作っていたことは想像に難くない。

#### 宣州留贈

#### 宣州留贈

紅鉛濕盡半羅裙 紅鉛濕い盡くして羅裙半ばなり

洞府人間手欲分 洞府人間手づから分けんと欲す

滿面風流雖似玉 滿面の風流玉に似ると雖も

四年夫婿恰如雲 四年夫婿恰も雲の如し

當春離恨杯長滿 春に當たりて離恨杯長へに滿ち

倚柱關情日漸曛 柱に倚りて關情日漸く曛ず

爲報眼波須穩當 爲に眼波に報ずること須らく穩當なるべし

五陵遊宕莫知聞 五陵の遊宕知聞すること莫かれ (『樊川外集』)



贈別

贈別

娉娉裊裊十三餘

娉娉裊裊たり十三餘

荳蔻梢頭二月初

荳蔻梢頭二月の初め

春風十里揚州路

春風十里揚州の路

卷上珠簾總不如

卷きて珠簾を上ぐ總て如かず (『樊川文集』卷四)

或いは、五言古詩の大作「張好好」詩(『樊川文集』卷二)も、女性の嫻たふやかさを詠いあげた艶麗な詩で、やはり先に挙げた二首の詩と同じく、この頃の作である。

また杜牧が四十二歳から四十四歳にかけて池州刺史の任にあった時、杜牧とほぼ時代を同じくした詩人張祜が、彼に贈ったと思われる詩に次の如きものがある。

讀池州杜員外

池州杜員外の杜秋

杜秋娘詩

娘の詩を讀む

年少多情杜牧之

年少の多情杜牧之

風流仍作杜牧詩

風流仍りて杜秋詩を作る

可知不是長門閉

知るべし是れ長門閉ちて

也得相如第一詞

也た相如の第一詞を得るにあらざるを (『全唐詩』卷五百十一 張祜)

この詩は、杜牧の「杜秋娘」詩(『樊川文集』卷二)を褒めあげていたのであるが、第一句・第二句目の「年少多情杜牧之 風流仍作杜秋詩」という詠みぶりは、「杜秋娘」詩をはじめとした艶麗な詩が、杜牧の「年少」の頃に集中して作られていたことを物語っているともいえよう。

さらに、杜牧が生きた時代よりも約半世紀ほど下る文人・皮日休(？～八八〇?)の文に次の如きものがある。

祐、元和中宮體詩を作る。詞曲豔發にして、當時の輕薄の流、其の才を重んじ、合譟して譽を得。老大するに及び、稍や建安の風格を窺ひ、樂府錄を誦し、作者の本意を知る。諷怨譎を講ずる時、六義と相左右す。此れ才の最たるなり。祐、初めて名を得しとき、乃ち樂府豔發の詞を作る。其れ不羈の狀、往往に間見す。凝の操履、史に見えず。……(中略)……。

樂天、方に實行を以て才を求め、凝を薦めて祐を抑ふ。其れ當時に在りて、理其れ然るなり。

令狐楚、祐の詩三百篇を以て之を上る。元稹曰く、雕蟲小技にして、或いは之を獎激せば、風教を害せんことを恐る、と。

祐、元白の時に在りて、其の譽は甚しくは持重せられず。杜牧之、池州に刺たりて、祐且に老いんとす。詩益ます高く、名益ます重し。然れども牧之の少年のとき爲りし所も亦祐に近し。祐の爲に白を恨むは理も亦之れ有るなり。(『全唐文』卷七百九十七 皮日休「論白居易薦徐凝屈張祐」)

この文も、張祐に關連した記事であるが、これに因ると、張祐は元和年間(八〇六～八二〇)に盛んに宮體詩を作つて世にもはやされていたが、元稹の「風教を害する」という評語にあるように、元稹・白居易からは軽んじられていた。ところが、杜牧は、池州刺史の時代に張祐と知り合い、杜牧が「少年」の時に作っていた詩も張祐の詩と似通う所があったので、張祐の爲に白居易を恨んだのだと説明している。

これら二つの資料、つまり張祐の「讀池州杜員外杜秋詩」と皮日休の「論白居易薦徐凝屈張祐」は、まさに、杜牧が江南にいた頃、「宣州留贈」や「贈別」といった一連の艶麗な詩を作っていた事実の有力な裏付けとなるであろう。

このように、杜牧の若い頃(江南にいた十年間)の詩を見てみると、かなり艶麗なものを集中的に作っていたことが判るが、さて杜牧は十年に亘る江南での地方生活を終えて、都・長安に帰ると、がらりとその詩風を変えていくのであった。

開成三年（八三八）、杜牧（三十六歲）が左補闕史館修撰として長安に戻る一年前の詩に「大雨行」という作品がある。それには大雨の凄じさを述べた後に続けて次の如く言う。

大和六年亦如此 （八三三）  
大和六年も亦此くの如し

我時壯氣神洋洋 我時に壯氣 神洋洋

東樓聳首看不足 東樓聳首して看て足らず

恨無羽翼高飛翔 恨むらくは羽翼の高く飛翔する無きを

盡召邑中豪健者 盡く邑中の豪健なる者を召し

闊展朱盤開酒場 闊く朱盤を展して酒場を開く

奔光槌鼓助聲勢 奔光槌鼓 聲勢を助け

眼底不顧纒腰娘 眼底顧みず纒腰娘

今年鬬茸髮已白 （八三三）  
今年鬬茸 髮已に白く

奇游壯觀唯深藏 奇游壯觀 唯だ深く藏するのみ

景物不盡人自老 景物盡きず人自ら老い

誰知前事堪悲傷 誰か知らん前事の悲傷に堪へたるを 〔樊川文集〕卷一

これを見ると、杜牧は、江南での生活を終りかける頃から、既に以前のような勇壮な気概は消え失せてしまい、得も言えぬ感傷に浸っていることが窺える。では、これほどまでに杜牧を意気消沈とさせたのは何であったのか。更に

続けて次に掲げる詩を見ることにする。

和州絶句

和州絶句

江湖醉度十年春

江湖醉ひて度る十年の春

牛渚山邊六問津

牛渚山邊六たび津を問ふ

歴陽前事知何實

歴陽の前事 知る何の實ぞ

高位紛紛見陷人

高位紛紛として陥らるる人（『樊川文集』卷四）

この詩は、先に挙げた詩が作られた次の年の開成四年（八三九）、杜牧（三十七歳）が左補闕史館修撰として、江南から長安へ戻ったばかりの時の作である。特に、この詩の第四句「高位紛紛見陷人」は、時の政情に対する杜牧の不安をよく表わしているといえる。

これより先、杜牧は科擧の試験に合格して、頗る得意な気持ちのままに風光明媚な江南の地で、自由奔放に生活したのだが、この時期は、一種の官僚見習い期間でもあり、現実的に政治に参加しているという意識は無かったといえる。ところが、開成年間に至って、中央官僚に栄転し、政治の実体をまのあたりにするや、それまでの意気揚々とした気持ち、かなり殺がれてしまったのである。

更には、先に紹介した「念昔游」「題禪院」「遣懷」などの詩は、江南時代の楽しかった日々を詠んではいるが、実は現在の鬱鬱としてやりきれない気持ちの裏返しであることも見逃してはならない。

もっとも、杜牧が当時の為政者に不満があったことは、これまで多くの論者が指摘しているが如くであるが、実際、杜牧が政治と深く関わりを持ち始めるのは、この頃からであり、それに伴って、杜牧の詩風も大きな変化を見せはじめるのである。

卽事黃州作

卽事黃州作

因思上黨三年戰

因に思ふ上黨三年の戰

閑詠周公七月詩

閑に詠ず周公七月の詩

竹帛未聞書死節

竹帛未だ死節を書するを聞かず

丹青空見畫靈旗

丹青空しく靈旗を畫くを見る

蕭條井邑如魚尾

蕭條井邑魚尾の如く

早晚干戈識虎皮

早晚干戈虎皮を識る

莫笑一麾東下計

笑ふこと莫かれ一麾東下の計

滿江秋浪碧參差

滿江の秋浪 碧參差 (『樊川文集』卷三)

この詩は、会昌四年(八四四)、杜牧(四十二歳)が黃州刺史の任にあつた時の作である。澤潞で昭義軍節度使・劉稹が朝命を拒んだことから起つた「上黨三年戰」に、彼は極めて強い関心を寄せていることが判る。更に杜牧は、次のような詩も作っている。

雪中書懷

雪中に懷を書す

臘雪一尺厚

臘雪一尺厚く

雲凍寒頑癡

雲凍りて寒さ頑癡なり

孤城大澤畔

孤城大澤の畔

人疎煙火微

人疎にして煙火微なり

憤排欲誰語

憤排誰にか語らんと欲す

憂慍不能持

憂慍持する能はず

天子號仁聖

天子 仁聖と號し

任賢如事師

賢を任じて師に事ふるが如し

凡稱曰治具

凡そ稱して治具と曰はば

小大無不施

小大施さざるは無し

明庭開廣敞

明庭開きて廣敞

才僞受羈維

才僞羈維を受く

如日月縮昇

日月縮昇の如く

若鸞鳳葳蕤

鸞鳳の葳蕤の若し

人才自朽下

人才自ら朽下

棄去亦其宜

棄去するも亦其れ宜なり

北虜壞亭障

北虜 亭障を壞ち

聞屯千里師

千里の師を屯すと聞く

牽連久不解

牽連久しく解けざれば

他盜恐旁窺

他盜恐らくは旁窺せん

臣實有長策

臣實に長策有り

彼可徐鞭笞

彼徐ろに鞭笞すべし

如蒙一召議

如し一召議を蒙らば

食肉寢其皮

肉を食ひ其の皮に寝ねん

斯乃廟堂事

斯れ乃ち廟堂の事

爾微非爾知 爾微なれば爾の知るところに非ず

向來躡等語 向來 等を躡ゆる語

長作陷身機 長く身を陷るる機と作らん

行當臘欲破 行く當に臘の破れんと欲するに

酒齊不可遲 酒齊遅るべからず

且想春候暖 且つ想ふ春候の暖

甕間傾一卮 甕間一卮を傾けん (『樊川文集』卷二)

この詩も、会昌二年(八四二)、杜牧(四十歳)が黃州刺史の任にあった時の作である。これを詠めば、杜牧の政治に参画したいという熱望を汲み取れると同時に、政情がそれを許さないであろうという諦めをも感じる。

とにかく、杜牧が江南から中央に戻ってから以後、死に至る迄(その間、黃州・池州・睦州・湖州と地方の刺史を歴任するが、それらを含めて)、杜牧の詩には、政治社会を中心に据えた、現実的色彩の濃い作品が多くなるのである。そうした作品のうち、顕著なものを詩題のみ挙げ、これを製作年代順に並べると次の如くである。

「李甘詩」(『樊川文集』卷一) 三十七歳

「郡齋獨酌」(同集卷一) 四十歳

「早雁」(同集卷三) 同

「東兵長句十韻」(同集卷二) 四十一歳

「皇風」(同集卷一) 四十二歳

「昔事文皇帝三十二韻」(同集卷二) 四十六歳

「今皇帝陛下詔徵兵不日功集河湟諸郡次第歸降臣獲親聖功輒獻歌詠」(同集卷二) 四十七歳

これら政治色の濃厚な詩は、かつての江南の自由な雰囲気の中では到底詠まれるはずもないものであった。このように、江南での生活を終えてから以後の杜牧の詩風は、散文全体から窺える歴史家・経世家の気風と一脈通ずるものがある。杜牧の詠史詩についても、その製作年代が認められるものは、江南時代を終えてから以後のものばかりであるし、その創作基盤に、日頃の歴史家・経世家としての自負を無視することはできない。かくしてここに、詩と散文の両者の文学思想が始めて同質のものに帰着したと見なすことができる。

## 五

これまで杜牧の散文なり、詩歌なりを吟味することに因って、杜牧の詩歌は、初めは艶麗な詩風だったものが、後年、散文から看取されるが如く、歴史家・経世家としての自負に支えられる、一種の剛直な気風に収束していくという一応の結論をみた。

ところで、幸いなことに、杜牧には彼の文学観を端的に示す作品が残されており、それを考察していくことによつて、先に提示した結論の確認を試みたい。

杜牧が、艶麗な詩を盛んに作っていたと思われる江南での生活を終え、その直後の頃に作ったと思われる文章に次のようなものがある。

嘗て曰く、詩は以て歌ふべく、以て竹に流し、糸に鼓すべく、婦人小兒の皆諷誦せんと欲す。國俗の薄厚之を詩に扇ぎ風の疾速するが如し。嘗に痛む、元和より已來、元・白詩なる者有り、纖豔不逞にして、莊士雅人に非ざれば、多く其の破壊する所と爲る。民間に流れ、屏壁に疏し、子女父母、交口教授し、淫言嫖語、冬寒夏熱のごとく人の肌骨に入りて、除去すべからず。吾、位無く法を用いて以て之を治するを得ず、と。後代をして發憤す



る者有るを知らしめんと欲し、因りて國朝已來、古詩に類するものを集めて、若干首を得、編して三卷と爲し、目して唐詩と爲し、序を爲りて以て其の志を導く。〔樊川文集〕卷九「唐故平盧軍節度巡官隴西李府君墓誌銘」

これは、杜牧の友人李戡なる人物の爲に作った墓誌銘の一部であるが、ここで杜牧は、白居易・元稹らの元和体の猥らな詩が風俗を乱すという李戡の痛烈な批判を引いている。この言葉は、たとえ杜牧自身の吐いた言葉ではないにしても、杜牧が強く共鳴した李戡の言動であったといえる。杜牧がこの李戡の墓誌銘を作った時期は、明確には定め難いが、李戡が死んだ開成二年よりは、さほど下るものではないと考えられる。だとすれば、この頃の杜牧は、開成四年二月に左補闕史館修撰となって長安に戻っているので、先にも明らかにし得た如く、杜牧の詩風に大きな変化があった時期である。故に、江南では盛んに元和体にも似た艶麗な詩を作っていた杜牧が、政治色の濃厚な詩を作るようになった過程の中で、このような文学論を打ち出していることには、何ら不自然なものはないのである。しかるに従来、杜牧について次のような批判がある。

杜牧、李戡の墓誌を作りて、戡の元・白の詩を詆る語を載せり。所謂莊人雅士の爲る所に非ずして、淫言媒語人の肌骨に入るは、元稹の論ぜざる所なり。樂天の諷諫・閑適の辭の如きは、概ね淫言媒語と言ふべきや。戡、何人か知らずして、牧、之を稱ひて過れること甚し。古今の妄人自ら量ず、好く抑揚与奪して、人輒ち信ずるの類なるのみ。牧の詩の纖艶淫媒なるを觀るに、乃ち正に其の言う所にして自ら知らざるなり。〔避暑錄話〕卷下

これは、宋の葉夢得（一〇七七—一一四八）の『避暑錄話』に見える言葉であるが、ここでは、元白の詩に対して、李戡と杜牧が全く無理解で、しかも杜牧こそ「纖艶淫媒」に類する詩があるではないかという批判がなされているが、この葉夢得の批判も、杜牧の詩を平面的にしか捉えていない議論であり、杜牧の詩風の変遷を考慮に入れるならば、何ら矛盾する所はなく、杜牧自身の創作意識の中でも充分に説明のつく問題であったといえる。

爾來、杜牧は艶麗な詩に対して、終始否定的な考えを持ち続けたといえる。

某、啓す。某、苦心して詩を爲り、本高絶を求めて、奇麗を務めず。習俗に涉らず、今ならず、古ならず、中間に處る。既に其の才無く、徒らに其の奇有り。篇成り紙に在るも、多く自ら之を焚く。今謹みて一百五十篇を録し、編して一軸と爲し、封留して獻上す。(『樊川文集』卷十六「獻詩啓」)

この「獻詩啓」の文中に見える「一百五十篇」という作品の多さと、「篇成り紙に在るも、多く自ら之を焚く」という言葉は、杜牧の甥の裴延翰が作った「樊川文集序」に所謂「明年(五十感)の冬、中書舎人に遷り、初めて少しく恙を得たり。盡く文章を搜し、千百紙を閲し、擲げて之を焚く。纔かに屬留する者十に二三のみ」という言葉と互いに呼応している。かかる現象から、この「獻詩啓」は、杜牧晩年の作品であると考えられる。さて、この文中で杜牧は「奇麗を務めず、習俗に涉らず」と述べているが、この「奇麗」が李賀の詩風を、「習俗」が元稹・白居易の詩風をそれぞれ意識した評語であることは、従来の論者の説くが如くであるが、この文章と先の李戴の墓誌銘と併せて考えてみると、杜牧は晩年に至るまで、艶麗な詩に対して否定的な考えを持ち続けていたことが判る。これら杜牧の文学観は、恰も杜牧後年の詩歌から感得される印象と一致するものがあるといえる。

ところで、杜牧は艶麗な詩に対して否定的な考えを持っていたのみならず、具体的に否定的な行動を取った形跡があるのである。先に挙げた裴延翰の「樊川文集序」には次の如く述べている。

明年の冬、中書舎人に遷り、始めて少しく恙を得たり。盡く文章を搜し、千百紙を閲し、擲げて之を焚く。纔かに屬留する者十に二三のみ。延翰、撮髮してより書を読み文を學び、率ね導誘を承く。伏して念ふに、始初めて出仕入朝し、三たび太史筆に直し、比ごろ四たび出でて守たり。其の間二十年に餘りあり。

凡そ撰制・大手短章・塗菓醉墨・碩影纖屑有らば、僻阻に適くと雖も、數千里を遠しとせずして、必ず寫示を獲。是を以て延翰が久しく藏蓄する者に在りて、甲乙目を籤し、焚外と比較するに、十に七八多し。詩・賦・傳・錄・論・辯・碑・誌・序・記・書・啓・表・制・離ちて二十篇と爲し、合して四百五十首と爲し、題して樊川集と曰

ここには、裴延翰が杜牧の文集を編纂するに至った経緯が詳しく語られている。つまり杜牧は、晩年に至り、それまで彼が作った詩文を検閲した結果、その二三割だけを残して残りのものは焼き捨ててしまったわけである。ところが、杜牧の甥・裴延翰が、常日頃から杜牧の詩文を書き写していた為に、杜牧が残して置いた詩文より七八割多くあり、それと併せて二十篇四百五十首の『樊川集』が編まれたと言う。現在、我々が目にすることができる明翻宋刊本四百六十二首の『樊川文集』が、裴延翰の編んだその『樊川集』の原形にほぼ近いものと考えられている。なお、これとは別に、『樊川集』に漏れた詩を集めたものとして、唐末に『外集』が、さらに北宋に『別集』がそれぞれ編まれている。

ところで、この『樊川集』の編纂過程について、小川環樹氏は『唐詩概説』の中で、「李商隱が七言律の無題詩において最も特色をあらわしたように、杜牧も或る期間には多くの艶詩を作ったらしい。(中略)死の前年に原稿の大部分を自ら焼きすてた結果、死後編せられた『樊川文集』二十巻に収められた艶詩は少数となった」と述べている。小川氏は根拠となる資料を挙げていないが、極めて示唆に富む見解と言える。何故ならば、杜牧が艶麗な詩を善くしたと、読者に強く印象づける「遣懷」や「宣州留贈」の詩は、『樊川文集』の中にはなく、それぞれ『外集』『別集』の中に見出すことができるからである。

更には、杜牧が風流才子であることを語るさまざまな詩話の中に引用されている詩も、やはり『外集』『別集』の中に多く見出すことができる。

例えば、元の辛文房の『唐才子傳』巻六には、杜牧が大和九年(三十三歳)から開成二年(三十五歳)にかけて、洛陽で監察御史の任にあった時、或る家で当代随一と称される歌妓を含めて宴が催されたが、杜牧が役職上風紀を取り締まる任にあったので招待されずにいたのを、わざわざ杜牧の方から招待を催促し、会場に押しかけ、次の詩を歌妓

に贈っている。

兵部尚書席上作 兵部尚書の席上の作

華堂今日綺筵開 華堂に今日綺筵開く

誰喚分司御史來 誰か分司御史を喚びて來たらしむ

忽發狂言驚四座 忽ち狂言を發して四座を驚かす

兩行紅袖一時回 兩行の紅袖一時に回る (『樊川別集』)

或いは、また宋の計有功の『唐詩紀事』卷五十六には、大和の末(三十三歳ごろ)、杜牧が湖州に在った時、十歳余りの娘を見染めて、「十年後にこの郡の太守となって戻るから。」と、結納までするが、その後、杜牧が湖州刺史として再びやってきた時は、大中四年で、既に十四年の月日が流れており、その娘は別の男の所に嫁いでいた。その時に作ったのが次の詩である。

歎花 花を歎く

自恨尋芳到已遲 自ら恨む芳を尋ねて到ること已に遲きを

往年曾見未開時 往年曾て未だ開かざる時を見る

如今風擺花狼藉 如今風擺ひて花狼藉たり

綠葉成陰子滿枝 綠葉陰を成して子は枝に滿つ (『樊川外集』)

このように、艶麗な詩や杜牧が風流才子であったということの根拠となる詩の多くが『樊川文集』にはなく、『外集』『別集』の中に見出すことができるということは、杜牧に、晩年、詩文を採取するに当たって艶麗な詩は残さないという選択意識があったことを充分に推察せしめるものである。

『樊川詩注』四卷の注釈者である清の馮集梧はその序文の中で次の如く述べている。

此の四卷の外、又外集・別集各の一巻有り。茲れ多く未だ論及するに暇あらず。蓋し亦牧之手づから焚棄する所にして散落して別に見ゆる者なるを以て、其の存するを欲する所に非ざるなり。趙岐、孟子に于て、外書四篇の爲に注を作らざるも、亦其の例なり。

すなわち、馮集梧が『外集』『別集』に注を施さなかったのは、杜牧の選択意識を重んじたからだ、という暗示的な発言である。

もっとも、裴延翰が編んだ『樊川集』二十卷四百五十首は、その序にも明らかなように、裴延翰が、杜牧の焚き捨ててしまった詩文の中からも追加して、成立しているので、実際には、杜牧自身が残して置いた詩文は、更に少なかったはずである。因みに、裴延翰の説明をもとに、杜牧が焼き残した詩文の数を単純に計算してみると、三百首足らずになる。従って、現行本『樊川文集』の中に見える艶麗な詩、例えば「贈別」(前出)・「屏風絶句」(同集卷三)などは、杜牧が焼き捨ててしまったけれども、裴延翰が拾って追加したものという推測も成り立つであろう。

のみならず、杜牧が艶麗な詩を盛んに作ったと考えられる江南時代の作品が極端に少ないのも、この頃は杜牧がまだ若くて作品自体少なかったのだと説明するよりも、杜牧が艶麗な詩を焼き捨ててしまった結果そうだったのだと説明した方が自然に思われる。

## 六

このように杜牧の詩と散文を製作年代に従って検討してみると、「艶麗」な詩文を善くする杜牧と、「剛直」な詩文を善くする杜牧との平面的な構図はないことが判った。確かに、杜牧は艶麗な詩を作ったのであり、その力量は後世の論者の認める所でもあった。

杜牧が江南の十年に及ぶ生活の中で艶麗な詩を作ったことについては、いろいろな理由が挙げられる。

第一に、この論稿の初めにも言及した様に、杜牧が政治社会の中で拘束されているという感覚が薄い環境の中において、また自由奔放に行動し得る年齢であったこと。

第二に、山内春夫氏も説明されるが如く、当時、詩壇の主流であった元和体から強い影響を受けていたこと。

第三に、江南の土地が、綺麗艶麗な六朝文学ゆかりの地であったこと。

これらの創作因素を持つ故に、杜牧は艶麗な詩を善くする詩人として一生を終えるかに見えたのであるが、生来、歴史家・経世家としての自負を持つ彼は、現実社会の厳しさの前に狼狽しつつも、政治社会に関わっていかうとする姿勢だけは崩さなかったのである。それ故に、風教を乱すような艶麗な詩に対する批判と反省があり、しかも晩年に自作の艶麗な詩を焼き捨てるという行為にまで及んでいる。そして、おのずと杜牧の詩歌にみられる文学思想が、散文にみられる文学思想の「剛」なるものへと帰一していくのである。先に挙げた「歎花」詩は、杜牧の風流才子ぶりを示す資料とし引いたのであるが、この詩が作られた時期は、湖州刺史の時であるから、艶麗な詩を作る風流才子としての杜牧の姿は無いはずである。繆鉞氏は『杜牧年譜』の中で、いろいろと例を挙げて、後人の偽作ではないかと述べている。もしそうであるならば、それは杜牧の文学を平面的にしか捉えていないことからくる誤りであるといえよう。

(五七・十一・二十八)

#### 注

- (1) 一九七二年 臺灣藝文印書館
- (2) 一九八〇年七月 大谷女子大學紀要第十五號第一輯
- (3) 一九七八年九月 上海古籍出版社「樊川文集」をテキストに使った
- (4) 一九八〇年十一月 中國文學論集第九號

- (5) 杜牧の作品の製作年代については、繆鉞氏の『杜牧年譜』（一九八〇年 人民文學出版社）を参考にした
- (6) 山内春夫氏「杜牧の詠史詩について」（一九六一年 東方學第二十一號）には、當時の政治社會の中から杜牧の詠史詩が生まれる必然性について詳しく論じられている
- (7) 中國詩人選集別卷（一九七七年三月 岩波書店 八一頁）
- (8) 「杜牧と李商隱との關係について」（一九六八年三月『吉川博士退休紀念中國文學論集』）